

飼料用青刈稲の栽培について

第1報 品種および移植期

井手眞一・鍛治原俊夫・坂井定義(熊本県農業試験場・熊本県農政部)

IDE, S., T. KAJIHARA and Y. SAKAI: Cultivation of Forage Rice Plant. 1. Cultivar and Transplanting Time

本県における転作作物としての飼料用青刈稲の栽培面積は年々増加し、1982年には833haの作付がなされている。しかし、青刈稲が水田単作地帯や排水不良田など、他の転作作物が作付困難な所に栽培されているため、刈取時期が糊熟期以前になり、通常の栽培法では湛水状態で刈取りを行わなければならない、機械刈りが困難で飼料としての利用率が極めて低い現状にある。このようなことから、青刈稲を飼料として効率的に利用するため品種および作期について検討したので報告する。

1. 試験方法

- 1) 供試品種 レイホウ(標準品種)、アルポリオJ-10、B.Honduras、Milfor-6、C₄-63
- 2) 移植時期 6月14日、6月29日、7月14日
- 3) 刈取り時期 各品種とも穂揃期
- 4) 耕種概要 栽植密度は22.2株/m²、N施肥量は6月14日、19日移植区1.1kg/a、7月14日移植区1.0kg/a

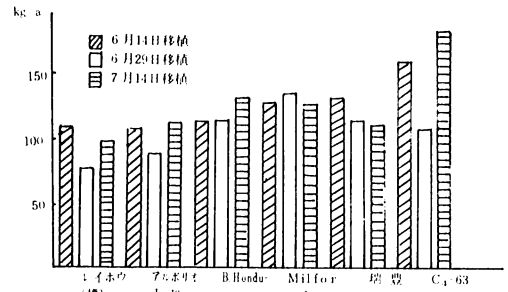
2. 試験結果と考察

6月14日移植の収量(風乾重)は、穂揃期までの生育期間が長くなったことと、7月の多雨の前にかかなりの生育量が確保されていたことなどから、各品種とも多収であり、その中でもMilfor-6、瑞豊、C₄-63はa当たり120kg以上の収量であった。

6月29日移植では、6月14日移植に比較すると、収量水準が低かった。これは、7月の多雨により初期生育が停滞し、その後の回復も遅れたためと考えられる。品種間では、Milfor-6、瑞豊、B.Honduras、C₄-63が多収であった。

7月14日移植では、標準的栽培の移植時期より2週間程度遅くなるため、十分な生育量が確保できないのではないかと懸念されたが、Milfor-6、C₄-63、B.Hondurasの生育は旺盛で、C₄-63はa当たり178.4kgと多収であった。このことから、上記3品種は、移植時期が7月中旬の晩植となっても、収量低下が少なく、晩植適応性の高い品種と考えられる。(第1図)

以上のことから、刈取時期を穂揃期とした場合、9月中



第1図 移植期別収量と出穂期

移植期	品種名	刈 取 時 期								
		9 月			10 月					
		上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬			
6月中旬	B.Honduras Milfor-6 瑞豊 C ₄ -63	■	■	■						
6月下旬	B.Honduras Milfor-6			■						
6月下旬	瑞豊 C ₄ -63						■	■	■	
7月中旬	B.Honduras Milfor-6 C ₄ -63								■	■

第2図 刈取時期別の移植期と適品種

に落水可能な圃場に限定すると、6月中旬移植のB.Honduras、Milfor-6、瑞豊、C₄-63、および6月下旬移植のB.Honduras、Milfor-6が適当とみられる。

しかし、大部分の圃場では、周辺水田の落水が行われる10月にならないと、機械による刈取作業はできないため、この時期に収穫するためには、6月下旬移植の瑞豊、および7月中旬移植のB.Honduras、Milfor-6が適するとみられる。(第2図)